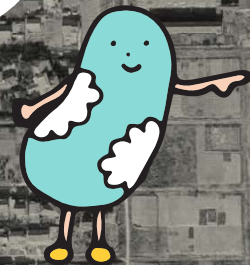


昔  
(60年以上前)



いま



ガイド  
マップ

# 山崎川の水の環

令和4年3月  
改訂版

なごやのまちにも、  
なごやの森にも、雨が降る。  
この雨は地面にしみ込み、  
一部は川底からも湧き出す。  
山崎川のまわりでの、水と人、  
生き物たちとの関わりを、  
ちょっとのぞいてみませんか？



# 山崎川の歴史

## 縄文時代

縄文時代の山崎川は、現在の瑞穂運動場あたりで海に流れ込んでいましたが、海面の低下と土砂の堆積で、河口は少しずつ南に下がっていました。

平安時代には、新瑞橋付近が河口であったと推定されています。



大曲輪貝塚（瑞穂公園陸上競技場西側）

## 江戸時代

元禄 14 年（1701 年）完成の巾着新田（現在の呼続大橋下流右岸）をはじめ新田の開発が進むと、山崎川は海面を残すかたちで人工的に延長されていきました。江戸時代の山崎川は、師長橋の上流まで舟が往来し、年貢米の積み出しなどを行っていたといわれています。

享保 13 年（1728 年）、暴れ川であった天白川の水を山崎川へ流入させるため、現在の瑞穂区と南区の境界付近に水路が造られました。しかし、山崎川が大雨のたびに氾濫するようになったため、寛保 2 年（1742 年）に元の流路に戻されました。

## 明治時代

明治時代に入ると、河口付近は工業地帯の造成の埋め立てが進んでいき、山崎川はほぼ現在の姿となり、全長 13.6 km の河川となりました。

## 景勝地としての山崎川

山崎川は、古くから景勝（風景が優れていること）・行楽の地として知られていました。中流の檀溪は、白林寺（現在の中区三丁目所在）の住職檀溪和尚が俗世間をのがれ、静かに暮らした地と伝えられており、「鸚鵡籠中記」の筆者である、朝日文左衛門もしばしば山崎川へ投網を打ちに訪れ、ハヤ、ウナギ、アユなどを獲ったと記しています。



尾張名所図会（檀溪）〔名古屋都市センター所蔵〕

## 現在の山崎川

治水機能の向上とあわせて、まちと調和した良好な水辺空間の創出に努める「ふるさとの川モデル事業」として、可和名橋から楓橋の区間で、昭和 63 年度から整備に取り組み、平成 20 年に終えており、瑞穂公園の近くには、水に親しむための親水広場も作られています。



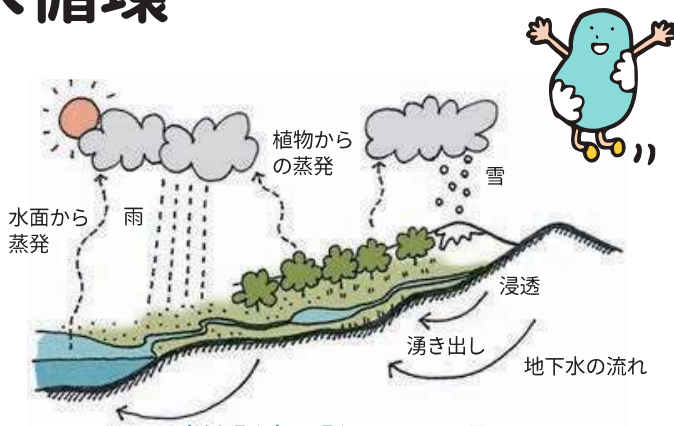
山崎川親水広場（瑞穂公園陸上競技場北側）

# 山崎川の水循環

## 水循環って何？

雨や雪、地面の下にある地下水、地下水が地表面に出てきた湧き水、川や池や海、植物の葉から放出される水蒸気など、水は色々な姿に形を変え、地球上をぐるぐるとめぐっていて、これを水循環（水の環）といいます。

雨や雪が降ると、一部は地面にしみ込んだり、池に貯まったりしながら、ゆっくりと移動します。しみ込んだ雨の一部は、土の中を流れながらきれいになり、少しずつ湧き出します。湧き出した水は、川や池などの水量、水質を安定させます。その他は、木や草の根に吸われて、葉から蒸散します。水は、蒸発するときに、まわりを冷やしてくれます。



水循環（水の環）のイメージ図

## 山崎川の湧き水

山崎川は、猫ヶ洞池を水源とし、東部丘陵地の西の縁に沿って南西に流下して名古屋港に注いでいます。

あまり知られていませんが、山崎川の中流域では、「湧き水」を見ることができます。現在確認ができているのは、石川大橋上流左岸の川底からと、鼎小橋の下流左岸です。名古屋市では、石川大橋付近に湧き水を紹介する看板を設置しています。



山崎川の湧き水（石川大橋上流左岸の川底）



山崎川の湧き水を紹介する看板

## 湧き水を増やすためには

湧き水は、降った雨が地中にしみ込み、ゆっくりと流れ、湧き出したものです。この湧き水を増やすためには、降った雨をより多く地中にしみ込ませることがとても重要です。緑や土の地面が増えれば良いのですが、かといって道路の舗装を剥がしたり、建物を壊したりすることはできません。



雨水浸透ます



透水性舗装

名古屋市では皆様にもご協力いただきながら、道路や駐車場の舗装を、水がしみ込みやすい「透水性舗装」にしたり、公園や道路、宅地などに、地中に雨をしみ込ませるための「雨水浸透ます」を設置したりしています。

市域の約 6 割が民有地ですので、名古屋市で暮らす皆様ひとりひとりに、雨をしみ込ませることに協力いただければと考えています。

# 地層から眺める

# 山崎川の湧き水

## 湧き水はどこからきたのか？

図 1 名古屋市域の地形

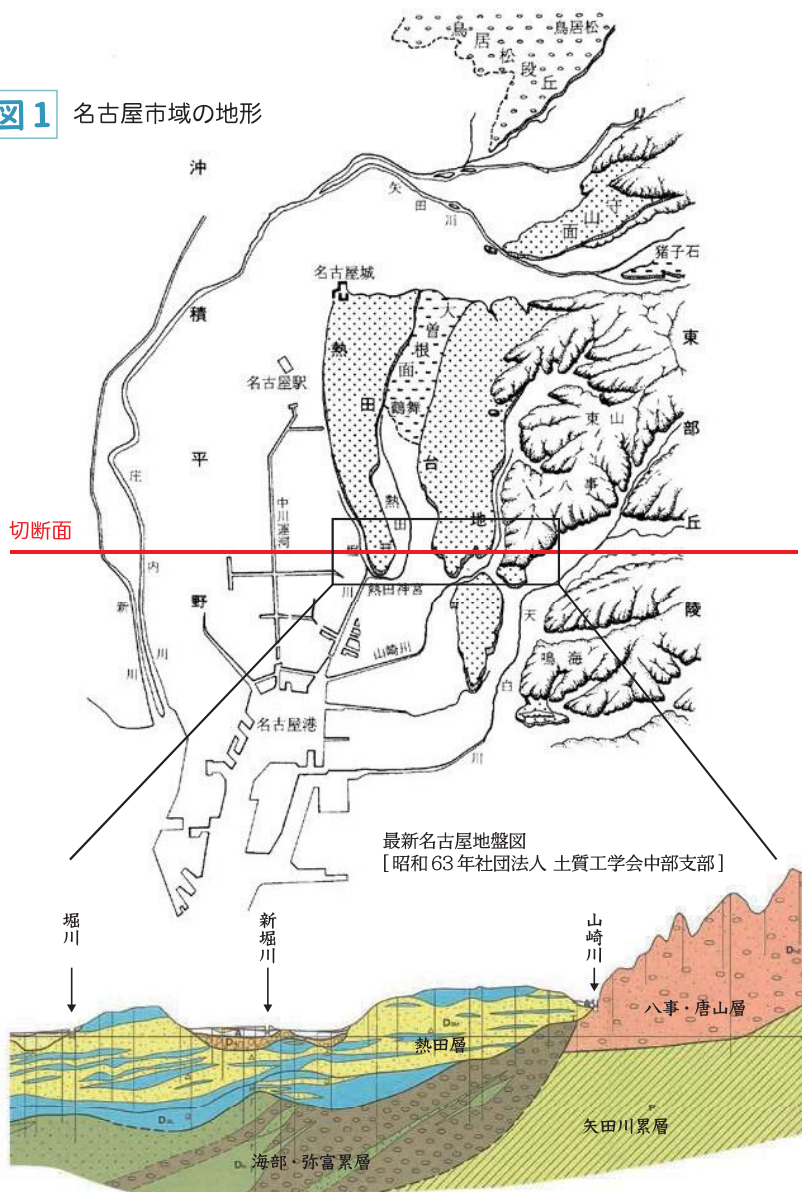


図 2 名古屋市域の断面図（切断面は図 1 参照）

名古屋市の地形は、東から西へ順に、丘陵地、台地、沖積平野と分けられます。図 1 を見てみると、山崎川の東側は丘陵地、西側は台地になっており、その間に山崎川が流れています。さらに、図 2 の横断面図を見ると、丘陵地の地層は八事唐山層、山崎川の下には、熱田層という地層があることがわかります。八事唐山層は、主に砂礫で構成されているため、降った雨が地中にしみ込み、地下水となりやすく、丘陵地の勾配により、山崎川に地下水が湧き出しやすいのではないかと推察されます。

また、湧き水が出ているあたりは小規模な沢地形になっており、山崎川では、この沢地形付近の中流域で河川流量が増加していることが確認されており、沢地形に沿って地下水が選択的に流動し、山崎川の流量増加に寄与している可能性も示唆されています。

名古屋市の調査では、陽明学区の中ほど、概ね 750,000 m<sup>3</sup> 程度の範囲に湧き水の涵養域（雨が地中にしみ込む範囲）が広がっていると推定されています。この区域にしみ込む雨の量が増えれば、湧き水の量も増え、今よりもさらに、きれいで豊かな水があり、生き物の多様性にも富んだ山崎川を見ることができるともかもしれません。

# 山崎川の水の環ガイドマップ



## あゆちの水(伝承地)

尾張名水の一つで、万葉集に詠まれた「小治田(をはりだ)の年魚道(あゆち)の水」はここであるという説があります。直径1m、深さ3mほどの井戸は日照りが続いても水が枯れなかったと言われ、多くの人々が利用していました。戦後は荒れ果てたままになっていましたが、地元の有志の方々の協力により現在の形になりました。



## あゆち年魚市湯景勝跡

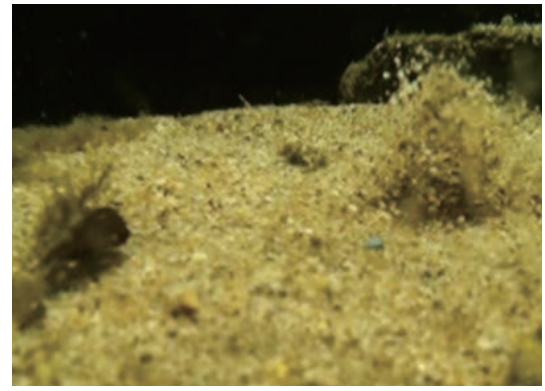
昔、このあたりは、あゆち湯(現在の熱田区から緑区のあたりは、昔は海でした)、知多の浦を望む景勝の地であって、万葉歌などが歌に詠んだところす。「あゆち」は「あいち」に転じ県名の語源となったと言われています。



山崎川の諸元  
流域面積: 26.6km<sup>2</sup>  
流路延長: 12.71km

## 山崎川の湧き水

石川大橋の上流部左岸、階段を下りた場所から川底をのぞいてみると、こぼこぼと湧き出る湧き水を見ることができる場合があります(6月~10月頃)。左岸(東側)の丘陵地帯に降った雨が、地下にしみこんで地下水となったものが湧き出ていると考えられています。近くには、この湧き水と山崎川の鮎のことを紹介した看板が立てられています。



## 猫ヶ洞池

尾張徳川家二代目藩主徳川光友の命令で農業用のため池として作られました。このため池には、雨水と湧き水の他、現在では東山公園内の上池(ポート池)からの水が新池を経由して流入しています。雨天時に一定水量を越えると千種川へ放流されます。



## あんきよ暗渠

猫ヶ洞池から田代本通4丁目付近までの山崎川は、一部暗渠(道路の下を川が通っている状態)になっています。以前はこのあたりでも川筋を見ることが出来ました。時代の流れの中で、山崎川の姿も様々に変貌してきたことが分かります。



## 鏡ヶ池

名古屋大学構内にある池で、山崎川の水源のひとつです。昔の航空写真を見ると、実は名古屋大学ができた当時からあったことがわかります。



## 地下鉄川名駅の湧水

地下鉄川名駅のトンネル内から湧き出ており、広路橋の下から山崎川に放流されています。川名公園の南側では、この湧水を活用し、保水性の高い舗装へと流すことで、路面を冷やす実証実験を行っています。



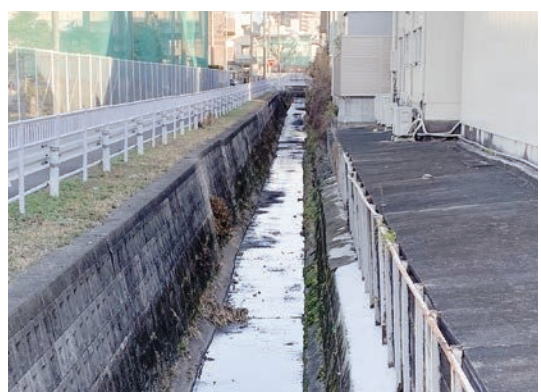
## 隼人池

江戸時代、尾張藩家老で犬山城主の成瀬隼人正正虎が、藤成新田の農業用かんがいのために設けたといわれています。当時は、檀溪橋のあたりで寛(かけい)によって山崎川を横断し、新田に水が送られていました。



## 五軒家川

江戸時代の前期、このあたりには、五軒の家があったことから五軒家という地名が付けられたと言われています。五軒家川は隼人池を水源とし、出合橋付近で山崎川に合流しています。



## 桜の名所



落合橋から石川橋までの2.5kmの間には、約600本の桜が植えられており、春には多くの方が訪れています。特に、以前木造であったことの風情を残す鼎小橋の付近には、美しい花をたくさん咲かせる老木が数多く残され、川面と相まって見所の一つとなっています。

## 山崎川のアユ



2019年7月 鼎橋下流で採捕

昔の山崎川は、きれいな水質が保たれ、大正初期までは、フナやシジミが獲れていました。しかし昭和に入ると流域の開発が進み、1960年代には水質汚濁がピークを迎えました。その後、下水道の改善などにより水質が好転しはじめ、今ではアユの遡上も確認されています。

- 河川・水路・ため池
- 河川・水路(暗渠)
- 代表的な桜並木
- 流域界
- 小学校区